

1 気象概況（6月1～3半旬：果樹研究所）

平均気温は、1半旬が17.6 で平年より1.3 低く、2半旬が21.0 で平年より1.3 高く、3半旬が20.4 で平年より0.7 高く経過しました。この期間の降水量は16.0mmで平年の41%でした。

2 土壌の乾燥状態（6月14日現在：果樹研究所）

土壌水分（草生栽培りんごほ場：無かん水）は、深さ20cmはpF2.9と乾燥していますが、深さ40cmはpF2.2、深さ60cmはpF2.3で、40cm以下は適湿範囲となっています。

3 生育概況（6月15日現在：果樹研究所）

表 主要品種の果実肥大（暦日比較 果樹研究所6月15日調査）

果実肥大	モモ				ナシ				リンゴ			
	あかつき		ゆうぞら		幸水		豊水		つがる		ふじ	
	縦径	側径	縦径	側径	縦径	横径	縦径	横径	縦径	横径	縦径	横径
実測値(mm)	41.6	36.5	40.1	32.0	26.2	31.5	28.8	30.8	39.4	40.4	36.0	35.9
平年比(%)	99	96	93	89	100	105	104	106	102	98	101	101

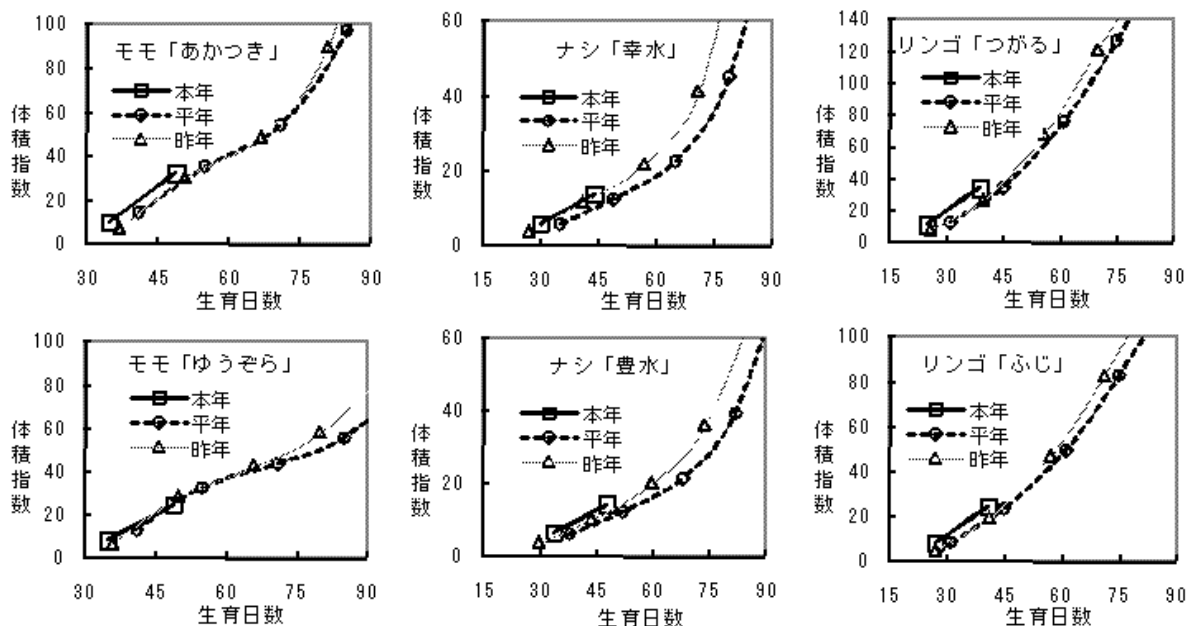


図 主要品種の果実肥大（6月15日現在）

(1) モモ

果実肥大を暦日で比較すると、「あかつき」は縦径が41.6mmで平年比99%、側径が36.5mmで平年比96%と平年よりやや小さく、「ゆうぞら」は縦径が40.1mmで平年比93%、側径が32.0mmで平年比89%と平年より小さい状況です。果実の生育日数による比較では、両品種ともに平年並み～やや大きい状況となっています。

「あかつき」新梢生長（満開後40日）は、長さが平年比74%と短く、新梢停止は平年より

遅い傾向が認められます。

「あかつき」の硬核期開始は6月16日で平年より5日遅れました。なお、果樹研究所によると、「あかつき」の収穫開始は平年より6日遅く、収穫盛りは平年より5日遅いと予測されています。

(2) ナシ

果実肥大を暦日で比較すると、「幸水」は縦径が26.2mmで平年比100%、横径が31.5mmで平年比105%とほぼ平年並み、「豊水」は縦径が28.8mmで平年比104%、横径が30.8mmで平年比106%と平年より大きい状況です。果実の生育日数による比較では、「幸水」は平年よりやや大きく、「豊水」は大きい状況です。

「幸水」の新梢生長（予備枝：満開後40日）は、長さが平年比135%と長く、葉数は平年比123%と多い状況です。

果樹研究所によると、「幸水」の収穫盛りは平年より4日遅いと予測されています。

(3) リンゴ

果実肥大を暦日で比較すると、「つがる」は縦径が39.4mmで平年比102%、横径が40.4mmで平年比98%、「ふじ」は縦径が36.0mmで平年比101%、横径が35.9mmで平年比101%と両品種ともに平年並みの状況です。果実の生育日数による比較では、両品種共に平年よりやや大きい状況です。

「ふじ」の新梢生長（満開後40日）は、長さが平年比84%と短かく、新梢停止も平年より早い状況です。

(4) ブドウ

「巨峰」の開花は6月8日で平年より2日遅く、満開は6月13日で平年より3日遅れました。新梢生育を過去4か年と比較すると、新梢長は長く、展葉数は多い傾向となっています。

(5) オウトウ

「正光錦」の収穫開始は6月16日で平年より4日遅く、昨年より7日早い状況でした。

4 栽培管理上の留意点

(1) モモ

ア 修正摘果

硬核期が終了し、果実に肥大差が見られるようになったら修正摘果を実施します。果頂部が変形している果実や縫合線が深い果実、果面からヤニが噴出している果実、果皮および果肉が変色している果実、極端に肥大の早い果実、果頂部の着色が早い果実などは、核や胚に障害があることが多いので、これらの果実に注意して摘果を実施しましょう。核障害の発生が多い場合は、2～3回に分けて修正摘果を実施します。

イ 着色管理

枝吊りや支柱立て、夏季せん定、反射シートの設置など収穫前の管理作業は、園地や品種の生育状況に合わせ遅れないよう実施しましょう。

(2) ナシ

ア 仕上げ摘果

仕上げ摘果は、予備摘果終了後、満開50日後までを目安に実施します。果形、肥大の良い果実を残して適正着果量に調整しましょう。特に、樹勢の低下や果実の肥大不良が見られる場合は、樹勢等に応じ強めに摘果し、着果過多にならないよう注意しましょう。

イ 予備枝の誘引

「幸水」の予備枝の誘引は、満開後65日頃（新梢停止期の約10日前）が適期です。花芽着生を促進するため、誘引を徹底しましょう。

（3）リンゴ

ア 着果管理

仕上げ摘果は満開60日後までに実施しましょう。小玉果、変形果、サビ果、傷果、病害虫果、果台の長い果そうの果実、果そう葉の少ない果そうの果実、長果枝の果実などを摘果し、形質の良い果実を残すようにします。摘果の程度は、「つがる」では3頂芽に1果（1果当たりの必要葉枚数45枚）、「さんさ」「緋のあづま」「ジョナゴールド」「陽光」「王林」「ふじ」は4頂芽に1果（1果当たりの必要葉枚数60枚）を目安に実施します。仕上げ摘果が遅れると、翌年の花芽分化が悪くなりやすいので、着果量の多い樹では遅くとも7月上旬までに適正着果量としましょう。

イ 新梢管理

梅雨期は徒長枝が繁茂するので、樹冠内部の日当たりと薬液の到達性を高めるため、6月下旬までを目安に夏季せん定を実施しましょう。夏季せん定は、主枝や亜主枝の背面から発生した徒長枝を中心にせん除しますが、過度な夏季せん定は、骨格枝背面の日焼けの発生を助長したり、樹液の流動を阻害することで樹体を衰弱させる原因となるので、切りすぎには注意しましょう。

（4）ブドウ

ア 摘房・摘粒

有核栽培では結実がわかり次第（満開後2週間頃）、1新梢1果房を目安に、単為結果が多い果房、花振るいが激しい果房、果粒肥大の揃いが悪い果房を中心に摘房を実施します。

また、摘粒は、実止まり決定後、有核果と無核果の区別が付くようになった頃から実施します。時期が遅れると果粒同士が密着し、はさみが入れにくくなり作業性が低下するので、遅れないように実施しましょう。

イ 新梢管理

実止まりが確認でき次第、強勢な新梢や混み合っている部分の新梢を切除し、樹冠の日当たりを確保しましょう。

5 病害虫防除上の留意点

（1）病 害

ア リンゴ輪紋病・斑点落葉病・褐斑病

梅雨期は、輪紋病、斑点落葉病、褐斑病の感染に好適な多湿条件になりやすいことから、防除の徹底を図りましょう。果樹研究所（5月31日：「ふじ」無防除樹）では褐斑病の初発生が確認されており、今後は二次感染を繰り返すので発生が見られる園では特に注意しましょう。

イ モモせん孔細菌病

降雨が多いと、二次伝染源による発病が増加しやすいため、今後も引き続き注意が必要です。発生が認められる園地では6月中旬以降10日間隔でせん孔細菌病防除剤を散布します。なお、早生品種では収穫前日数に注意が必要です。園内に春型枝病斑や発病葉および発病果が見られる場合は摘除し、適正に処分しましょう。

ウ モモホモプシス腐敗病・灰星病

梅雨期はホモプシス腐敗病の重点防除期であるので、6月下旬の防除を徹底するとともに、伝染源の芽枯れや枝枯れが認められる場合はせん除し、適正に処分しましょう。また、果実が成熟するとともに灰星病に感染しやすくなるので、6月下旬以降の防除を徹底しましょう。

エ ナシ黒星病・輪紋病

果樹研究所（6月10日現在：「幸水」無防除樹）における黒星病の発病葉率は平年並みですが、今後も引き続き注意が必要です。また、梅雨期は輪紋病の感染が多くなるので、6月下旬に両病害に効果がある薬剤を散布し防除を徹底しましょう。黒星病の罹病部位は見つけしだい取り除き、適正に処分しましょう。

オ ブドウ晩腐病

開花後は本病の重点防除期となるため、落花直後の防除を徹底しましょう。また、カサかけ、袋かけを適期に行い、感染を防ぎましょう。

(2) 虫 害

ア モモハモグリガ

第3世代の防除適期は7月1半旬～2半旬頃と推定されるため、この時期の防除を徹底しましょう。近隣に放任園などがある場合は、特に注意しましょう。

イ ナシヒメシンクイ

第2世代防除適期は7月1半旬～2半旬頃と推定されます。本種の第1世代は主にモモ等の核果類の新梢に寄生し、後半の世代はナシの果実への寄生が増加するので、モモとナシが混在する地域ではそれぞれの樹種での発生状況にも注意し、防除を徹底しましょう。

ウ モモノゴマダラノメイガ

被害が認められるモモ園では、6月3半旬頃から10日間隔で2～3回防除を行いましょう。なお、被害果実は見つけしだい摘除し、適正に処分しましょう。

病害虫の発生予察情報・防除情報

病害虫防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

<http://www.pref.fukushima.jp/fappi/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょう。